

[研究報告]

学校適応感と親密な他者から受けるソーシャル・サポート： アタッチメント・スタイルと社会的居場所の機能に着目した分析

金子紗枝子*・岩木 信喜**・高橋 功***

親密な他者との関係という観点から大学生の学生生活における適応感について検討した。人は親密な他者との間にアタッチメント関係を形成してソーシャル・サポートを受ける傾向がある。そこで、大学生を対象にアタッチメント・スタイルの回避次元と不安次元を測定し、それらと学校適応感、および、親密な他者から受けるソーシャル・サポートとの関係を調べた。その結果、回避傾向や不安傾向が低い学生ほど学校への適応がよく、ソーシャル・サポートの享受量も多かった。さらに、親密な他者がいる社会的居場所をもつ者はもたない者よりも学校適応がよく、ソーシャル・サポート量が多かった。したがって、回避傾向や不安傾向が強い者については、ソーシャル・サポートを受けやすくするために社会的居場所を整備すべきことが示唆された。また、社会的居場所の本来感の担保機能は不安次元と主に関連し、一方、自己有用性の担保機能は回避次元と主に関連していた。

キーワード：アタッチメント、学校適応、ソーシャル・サポート、社会的居場所

問題と目的

本研究は、大学生の学生生活における適応感と、親密な他者から受けるソーシャル・サポートに、アタッチメント・スタイルおよび社会的居場所の存在がどのように関わっているかを数量的に検討したものである。

大学生の学生生活における適応感

初等・中等教育における児童生徒の学校適応の問題は古くからの憂慮課題であり、例えば文部省（現文部科学省）の長期欠席児童生徒の調査は1951年から行われている（前島，2016¹⁾）。学校不適応の背景には、貧困や価値観の問題など多様な論点があるが、特に近年では心理的健康が重視されており、教職員はもちろん、専門機関とも連携したサポート体制の充実が求められている（e.g., 文部科学省, 2013²⁾）。

高等教育においても、学校適応へのサポートは無縁ではない課題である。高等教育機関1,191校を対象とした全国規模の調査（文部科学省，2014³⁾）によれば、平成24（2012）年度の中途退学者は79,311人であった（学生総数に対し2.65%）。分類されている限りの退学理由は、「経済的理由」（20.4%）、「転学」（15.4%）、「学業不振」（14.5%）が順に大きく、「学校生活不適応」（4.4%）は比較的小さいが、「学業不振」は広い意味での学校不適応であるし、他の理由もサポート次第で解決できる場合があるだろう。

また、退学や休学に至らずとも、学校生活に不適応感を抱える学生は少なくないと考えられている。とりわけ、2020年から今なお続く、いわゆる「コロナ禍」においては、通常の生活が大きく制約されたことによる、学

生の孤立や不安が懸念されており、各大学は交流の場を設けるなど様々な取り組みを行ってきた（日本学生支援機構，2023⁴⁾）。コロナ禍は一過性のものかもしれないが、皮肉にもコロナ禍下で進んだ教育の遠隔化・デジタル化は、コロナ禍後も更に発展・普及することが予想され、これに伴う対人関係の希薄化と心理的不適応も憂慮される。

こうした問題意識の中、本研究は、大学生の学生生活における適応感の関連要因の分析を企図し調査を行った。

親密な他者から受けるソーシャル・サポート

学校適応に期待されるものの一つとしてソーシャル・サポート（個人を取り巻く人々から受ける様々な支援）があり、様々な問題の緩和や対処における有効性が示されてきた（e.g., 嶋，1992⁵⁾；下村・木村，1997⁶⁾；山下・坂田，2008⁷⁾）。

実際、コロナ禍下で行われた各大学の取り組み事例も、電子会議形式の相談室を開設するなど、サポート体制の充実を図ったものが多い。学生相談室に類するものも今やほとんど全ての大学に設置されている。仲間同士の相互支援、いわゆるピア・サポートを促す取り組みも推奨されてきた（e.g., 日本教育カウンセラー協会，2001⁸⁾）。

しかしながら、組織的なサポート体制の充実にせよ、ピア・サポート活動の促進にせよ、それらはサポートの提供である。並行してサポートの享受という視点での議論も必要であろう。というのも、いかなるサポート環境も、享受されなければ意味がないからである。例えば、下村（2009）⁹⁾は大学の就職支援の課題として、支援の場

*人間生活学部児童学科 **聖学院大学人文学部児童学科 ***山陽学園大学総合人間学部ビジネス心理学科

に大学生を引き込むことの難しさを指摘している。

そこで本研究では、ソーシャル・サポートの享受の関連要因の分析も企図して調査を行った。サポート源には、組織的なサポート体制も含めて様々なものが想定されるが、研究の端緒として、ごく身近にいる親密な他者からのサポートに焦点を当てた。また、そのような他者にも様々な人物が想定されるが、本研究では、父母、大学の友人・知人、そして大学教員を想定して調査を行った。

アタッチメント・スタイルと対人関係

本研究では、大学生の学生生活における学校適応感および親密な他者から受けるソーシャル・サポートの関連要因の一つとして、「アタッチメント (attachment)」のスタイルに着目した。

アタッチメントとは、人が危機的 (と主観的に感じる) 状況で知覚される恐れや不安を、他者に近接することで低減し、安全・安心の感覚を回復しようとする行動傾向のことであり、そのシステムは進化的に獲得されたものであると考えられている (Bowlby, 1973¹⁰⁾)。

特に人生の最初期である乳幼児期に形成されるアタッチメントの性質は、その後の人生における様々な対人関係に影響することが示されており、極めて重要な影響源と考えられている。例えば、Schmitt (2005)¹¹⁾ によれば、アタッチメントの質は家族ストレスと関係し、アタッチメントの不安定さは配偶戦略にも影響するようである。また、他者の表情や言葉といった社会的手がかりの認知、情動制御などにもアタッチメントの個人差が影響している (Simpson & Rholes, 2015)¹²⁾。更に、幼少期の被養育経験が自分の子どもへの養育行動に影響することを示す長期縦断研究もある (Szepeswöl et al., 2015)¹³⁾。

さて、先行経験が後続経験に影響するわけであるから、そこには「記憶」が重要な役割を担っていると考えられる。Bowlby (1973)¹⁰⁾ は特殊な記憶を想定しており、それを「内的作業モデル (Internal Working Model)」と呼んだ。乳幼児は、危険や苦痛を感じると保護者に近接し、保護・慰撫してもらうことで、安心できる状態を回復させる。この行動に関する心理的な表象が内的作業モデルである。養育者との間で形成された内的作業モデルが、その後の発達における広範な人間関係を形成する基盤となるのである。例えば、恋人との関係もアタッチメント理論に基づいて説明できる (Hazan & Shaver, 1987¹⁴⁾)。

また、アタッチメントは、自己報告式尺度で測定した場合、「回避」と「不安」の2次元構造で説明できることが知られている (Brennan et al., 1998¹⁵⁾; Fraley et al., 2011¹⁶⁾)。「回避」は他者との親密さに心地よさを感じない程度を反映した次元であり、「不安」は他者に見捨てられることへの不安を反映した次元である (古村・村

上・戸田, 2016¹⁷⁾)。なお、異なる他者間 (父・母・恋人・友人) で算出されたアタッチメントの回避傾向および不安傾向の相関係数は高くても中程度、多くは弱いことが示されており ($.11 \leq rs \leq .44$)、内的作業モデルは、対象固有に形成される部分も大きいようである (Fraley et al., 2011¹⁶⁾)。

以上を踏まえ、本研究では、人生の初期に形成されたアタッチメントのスタイルを「回避」と「不安」の2つの次元で測定した。なお、人生の初期に形成されたアタッチメントの対象は、父母はもちろん、その他の人物も想定されるが、本研究では、影響が大きいと予想される第一養育者に絞って調査を行った。

調査に先立つ予測は次の通りであった。すなわち、「回避」と「不安」はいずれも程度が強くなるほど、親密な他者とのコミュニケーションは円滑さを欠く傾向が強まると考えられる。したがって、大学生生活の適応感とは負相関を示すと予想された。また、それらの次元はいずれも値が高まるほど、他者からソーシャル・サポートを得る有効性は低下すると考えられる。したがって、親密な他者から得られるソーシャル・サポート得点は低下し、負相関を示すと予想された。

社会的居場所としての友人

本研究では、もう一つの関連要因として「居場所」に着目した。居場所は、心理的健康に関わる重要な概念として既に研究が多く行われている (e.g., 杉本・庄司, 2006¹⁸⁾; 則定, 2008¹⁹⁾; 石本, 2010²⁰⁾; 石本, 2010²¹⁾; 西中, 2014²²⁾; 尾田・吉川, 2020²³⁾)。国の文教施策としても、学校での「居場所づくり」の取り組みが行われている (国立教育政策研究所, 2015²⁴⁾)。

この「居場所」という概念は抽象性が高いうえ、そもそも価値観を含んだ概念でもあるため、研究テーマの文脈に沿った定義を明確にしておく必要がある。例えば、杉本・庄司 (2006)¹⁸⁾ による小中高生 800 名を対象とした予備調査を見ると、「あなたにとって一番の『居場所』はどこですか?」という質問の回答で最も多かったのは、「自分の部屋」(260 名) であり、それは個人が脱社会化できる専有空間を意味していると考えられる。これは、学校での「居場所づくり」といった、教育研究の文脈で主として期待される「居場所」ではないだろう。

こうした中、石本 (2010)²⁰⁾ は、居場所を「一人であるときの居場所 (個人的居場所) (e.g., 図書館, 自分の部屋)」と「誰かと一緒にいるときの居場所 (社会的居場所) (e.g., サークル, 家族)」に分けたうえで、「本来感」と「自己有用感」との相関を調べた。その結果、「社会的居場所」の確保度を問う尺度得点のみ、「本来感」と「自己有用感」の尺度得点との正相関が確認された。ここでいう「本来感」とは「ありのままでいられるという感覚」、「自己有用感」は「役に立っていると思える感覚」

である。これらは、一般的に心理学研究の文脈における「居場所」に期待されている機能であり、石本（2010）²⁰⁾は、それらが主として「社会的居場所」の確保に関わるものであることを明確に示したといえる。

更に、石本（2010）²¹⁾は、中学生と大学生を対象に、これら2つの機能に基づく居場所感尺度を作成し、具体的人物（家族、友人、恋人〈中学生はクラス〉）についてそれぞれ評定させた。同時に、人物ごとに「ここが居場所だと感じる」という直感的な居場所感を述べた項目を5件法で評定させた。その結果、いずれの人物においても、居場所感尺度と直接的な居場所感を述べた項目の得点間に中程度以上の正相関（ $.639 \leq rs \leq .699$ ）が見られた。少なくとも中学生と大学生のもつ特定の人物に対する直感的な居場所感は、「本来感」と「自己有用感」をある程度反映したものであることが示されたといえる。

以上を踏まえ、本研究においては「居場所」を、「『本来感』と『自己有用感』を与えてくれる人物そのもの」と定義することとした。その対象には様々な人物が想定されるが、大学生が広く共通して関わる対象である「友人・仲間」に絞って調査を行った。また、調査協力者の負担軽減の観点から、尺度を用いずに、本来感と自己有用感に分けたうえで、それぞれ、そのように思える友人や仲間がいるかどうかを2択で尋ねることとした。

調査に先立つ予測は次の通りであった。すなわち、「本来感」と「自己有用感」は、言うまでもなく望ましい感覚であり、心理的健康そのものといって過言ではない。実際、石本（2010）²⁰⁾において、心理的 well-being 尺度との正相関も示されている。したがって、大学適応感、社会的居場所がある場合の方がいない場合よりも高い得点を示すと予想された。また、そのことが他者からのソーシャル・サポートによって支えられているならば、社会的居場所がある場合の方がいない場合よりも、ソーシャル・サポートも高い得点を示すと予想された。

なお、社会的居場所とアタッチメント次元の関連については、学校適応感とソーシャル・サポートの関連要因を検討するという研究目的においては補足的なものとなるが、探索的に分析することにした。

方法

調査協力者

埼玉県の四年制私立大学学部生 75 名、岡山県の四年制私立大学学部生 45 名、計 120 名が参加した。回答に不備のあった 12 名を除く 108 名のデータを有効回答とした。調査時期は、2022 年 12 月であった。

倫理的配慮

研究計画は聖学院大学研究倫理委員会の審査を受け、承認された（承認番号：第 2022-19b 号）。

調査紙の表紙には、研究目的、回収された調査紙の個

人情報としての扱い、統計的に処理されたデータの公表の断り、事後のデータ保管期間と廃棄方法について示した上で、調査協力が任意のものであることを明記した。回答は無記名によるものであった。

社会的居場所の測定

次の2項目を作成して用いた。すなわち、“大学の中に、一緒にいることで「ここはありのままの自分でいられる場所」だと感じる友人や仲間がいますか？”，“大学の中に、一緒にいることで「ここは自分が必要とされている場所」だと感じる友人や仲間がいますか？”であった。それぞれ“いる”か“いない”かを選択させ、“いる”を選択した場合は、そのことへの満足度を“満足していない”から“とても満足している”までの7段階で評定させた。これらの項目（“ありのままでいられる”，“自分が必要とされている”）は、それぞれ石本（2010）が述べるところの「本来感」と「自己有用感」に対応させたものであった。

アタッチメント・スタイルの測定

「アダルト・アタッチメント・スタイル尺度（Experiences in Close Relationship-Relationship Structures, 以下 ECR-RS）（Fraley et al., 2011¹⁶⁾）の日本語版（古村ら, 2016¹⁷⁾）を用いた。この尺度は、対象人物に対する態度傾向を示した項目を“全く当てはまらない”から“非常に当てはまる”までの7段階で評定させるものである。2つの次元で構成され、「回避」傾向を示した6項目（e.g., “私は、その人に心を開くことを心地よく感じない”）と「不安」傾向を示した3項目（e.g., “私は、その人に見捨てられるのではないかと不安に思う”）の計9項目から成る。本調査では“最初にあなたの第一養育者（乳幼児期に世話を主にしてくれた人）を思い浮かべてください。その方はどなたですか？”と尋ね、「母」、「父」、「その他」から選択させたうえで（「その他」の場合は対象を記述）、その対象に対する回答を求めた。

ソーシャル・サポートの測定

久田・千田・箕口（1989）²⁵⁾による「学生用ソーシャル・サポート尺度」を用いた。この尺度は、主に心理的なサポート内容を示す16項目（e.g., “あなたが落ち込んでいると、元気づけてくれる”）を“絶対違う”から“きっとそうだ”までの4段階で評定させるものである。本研究では、「父」、「母」、「今通っている大学の先生」、「それ以外の友人・知人」の四者について、それぞれ回答を求めた。

大学生生活の適応感の測定

「青年用適応感尺度」（大久保, 2005）²⁶⁾を用いた。この尺度は、学校生活で感じることに示した項目を“全く当てはまらない”から“非常によく当てはまる”までの5段階で評定させるものである。4つの下位尺度で構成され、「居心地の良さの感覚」に関する11項目

(e.g., “周囲に溶け込んでいる”), 「課題・目的の存在」に関する7項目 (e.g., “将来役に立つことが学べる”), 「被信頼感・受容感」に関する6項目 (e.g., “周りから頼られていると感じる”), 「劣等感のなさ」に関する6項目 (e.g., “周りに迷惑をかけていると感じる”〈逆転項目〉) の計30項目から成る。なお, 本研究においては, 大学生活への適応感に関する問いであることを明確に示すため, 全ての項目の冒頭に“大学において”という文言を追加した。

調査手続き

前述の順序, すなわち, (1) 社会的居場所の有無を尋ねる2項目, (2) ECR-RS 日本語版, (3) 学生用ソーシャル・サポート尺度, (4) 青年用適応感尺度の順に, 質問内容を示したA4版6頁及び表紙からなる冊子を作成した。これを大学の各授業の始めもしくは終わりに受講者に配布し, 協力を依頼した。基本的には翌週の授業で回収したが, 授業後の休み時間中などにすぐに回答してくれた協力者については, その場で回収した。

結果と考察

ECR-RS は得点が高いほどネガティブな(回避傾向や不安傾向が高い), ソーシャル・サポートと学校適応感については得点が高いほどポジティブな(サポートを享受している, 学校への適応感が高い)評価となるよう, 逆転項目の処理を行った。そのうえで, ECR-RS については次元ごと(回避, 不安), 学生用ソーシャル・サポート尺度については対象者ごと(父, 母, 先生, 友人・知人), 青年用適応感尺度については下位尺度ごと(居心地, 課題・目的, 被信頼感・受容感, 劣等感のなさ)に

各参加者の評定平均値を算出した。

社会的居場所については, 質問ごと(本来感, 自己有用感)に“いる”と答えたか“いない”と答えたかで回答者を二群に分けた。ただし, アタッチメント・スタイルと学校適応感, アタッチメント・スタイルとソーシャル・サポートの相関分析においては回答をプールした。

欠損値があった場合は, 対象人物単位で分析から除外した。このため, 以下の分析は必ずしも n が一致しない。

アタッチメントと学校適応感との関連

ECR-RS の各次元の評定平均値と, 青年用適応感尺度の各下位尺度の評定平均値との相関係数をそれぞれ算出し表1に示した。

アタッチメントの2つの次元である「回避」と「不安」は, いずれも適応感の下位尺度である「居心地の良さの感覚」と「課題・目的の存在」の両者と0.3程度の負相関を示した ($-0.28 \leq r_s \leq -0.32$)。しかし, 「被信頼・受容感」と「劣等感のなさ」との間には弱い負相関しか認められなかった ($-0.09 \leq r_s \leq -0.23$)。当初考えていたように, アタッチメントの回避や不安の傾向が強いと, 学校は居心地良く感じられにくく, 課題や目的が見出されにくい傾向があるようである。

アタッチメントとソーシャル・サポートとの関連

ECR-RS の各次元と, 対象者(父, 母, 先生, 友人・知人)別のソーシャル・サポート尺度の得点について, それぞれ相関係数を算出し表2に示した。

アタッチメントの2次元は「父」, 「母」と中程度の負相関があった。いずれの次元も「父」($r_s = -0.42$)よりも「母」(回避, $r = -0.69$; 不安, $r = -0.60$)との方が

表1 ECR-RS の各次元と青年用適応感下位尺度との相関

		青年用適応感尺度			
		居心地	課題・目的	被信頼・受容感	劣等感のなさ
ECR-RS	回避	-.32**	-.28**	-.23*	-.09
	不安	-.28**	-.30**	-.18	-.16
	n	107	107	107	107

ECR-RS: Experiences in Close Relationship-Relationship Structures. * $p < .05$, ** $p < .01$

表2 ECR-RS の各次元と学生用ソーシャル・サポート下位尺度との相関

		学生用ソーシャル・サポート尺度			
		父	母	先生	友人・知人
ECR-RS	回避	-.42**	-.69**	-.32**	-.39**
	不安	-.42**	-.60**	-.34**	-.24*
	n	92	103	101	104

ECR-RS: Experiences in Close Relationship-Relationship Structures. * $p < .05$, ** $p < .01$

表3 「大学の中に、一緒にいることで『ここはありのままの自分でいられる場所』だと感じる友人や仲間がいますか？」という社会的居場所に関する質問の回答別の各種尺度の度数、平均値、標準誤差、および、平均値の差の検定結果と効果量

本来感を感じる 居場所		ECR-RS		ソーシャル・サポート尺度				適応感尺度			
		回避	不安	父	母	先生	友人 知人	居心地	課題 目的	被信頼 受容感	劣等感 のなさ
有	<i>n</i>	86	86	74	83	81	84	86	86	86	86
	<i>M</i>	2.63	1.75	3.05	3.35	2.75	3.40	3.72	3.92	3.08	3.63
	<i>se</i>	0.14	0.14	0.09	0.08	0.07	0.06	0.09	0.08	0.11	0.09
無	<i>n</i>	19	19	16	18	18	18	19	19	19	19
	<i>M</i>	3.17	2.81	2.73	3.02	2.28	2.71	2.44	2.96	2.19	3.53
	<i>se</i>	0.28	0.40	0.19	0.16	0.15	0.16	0.14	0.21	0.20	0.18
平均値の差の 検定と効果量	<i>t</i>	1.67	2.35	1.46	1.80	2.72	3.47	6.33	3.74	3.60	0.50
	<i>p</i>	.097	.021	.149	.075	.008	.001	< .001	< .001	< .001	.619
	Cohen' <i>d</i>	0.41	0.75	0.40	0.48	0.77	1.22	1.58	1.24	0.91	0.12

ECR-RS: Experiences in Close Relationship-Relationship Structures.

表4 「大学の中に、一緒にいることで『ここは自分が必要とされている場所』だと感じる友人や仲間がいますか？」という社会的居場所に関する質問の回答別の各種尺度の度数、平均値、標準誤差、および、平均値の差の検定結果と効果量

自己有用感を 感じる居場所		ECR-RS		ソーシャル・サポート尺度				適応感尺度			
		回避	不安	父	母	先生	友人 知人	居心地	課題 目的	被信頼 受容感	劣等感 のなさ
有	<i>n</i>	72	72	62	70	70	71	72	72	72	72
	<i>M</i>	2.49	1.83	3.15	3.41	2.75	3.50	3.90	3.97	3.27	3.65
	<i>se</i>	0.14	0.17	0.10	0.07	0.07	0.05	0.09	0.09	0.11	0.10
無	<i>n</i>	33	33	28	31	29	31	33	33	33	33
	<i>M</i>	3.26	2.18	2.63	3.01	2.44	2.77	2.61	3.26	2.16	3.52
	<i>se</i>	0.25	0.27	0.16	0.14	0.12	0.12	0.11	0.15	0.14	0.14
平均値の差の 検定と効果量	<i>t</i>	2.66	1.10	2.76	2.51	2.14	5.15	8.40	3.86	6.03	0.76
	<i>p</i>	.009	.276	.007	.014	.035	< .001	< .001	< .001	< .001	.456
	Cohen' <i>d</i>	0.62	0.24	0.67	0.61	0.50	1.41	1.74	0.89	1.24	0.16

ECR-RS: Experiences in Close Relationship-Relationship Structures.

強い相関があった。つまり、不安や回避の程度が小さい人ほど、父母からサポートを享受する傾向が強いということである。「先生」や「友人・知人」から享受するサポートの程度については、父母ほどの明瞭な相関は認められなかったが ($-0.24 \leq rs \leq -0.39$)、傾向の方向性としては同様であった。

社会的居場所の有無と各変数との関連

社会的居場所に関する2項目それぞれについて回答に基づく群分けを行い、ECR-RSの各次元、学校適応感の下位尺度、そして対象者別のソーシャル・サポート尺度の評定平均値を算出した。平均値については群間で対応のない *t* 検定を行った。これらの数値を表3と表4に示

した。

表3は、「本来感」を感じる社会的居場所があるかどうかによって、適応感やソーシャル・サポートの享受が影響を受けるかどうかを示したものである。本来感を感じる場所がある者は、ない者よりも、「先生」や「友人・知人」から得るソーシャル・サポートが有意に多いという結果であった。効果量は「先生」よりも「友人・知人」の方が大きかった (Cohen's *d*, 0.77 vs. 1.22)。適応感に関しては、「居心地の良さの感覚」、「課題・目的の存在」、「被信頼・受容感」は「本来感」を感じる場所がある者が有意に高く、効果量も大きかった (Cohen's *ds* ≥ 0.91)。「劣等感のなさ」には有意差はなかった。社会

的居場所が提供する「本来感」が学生の適応感に大きく貢献していることを示唆する結果であった。

表4は、「自己有用感」を感じる社会的居場所があるかどうかによって、学校適応感やソーシャル・サポートの経験量が影響されるかどうかを示したものである。「自己有用感」を感じる居場所がある者は、ソーシャル・サポート得点はサポート源によらず全体的に高く、中程度以上の効果量であった（Cohen's $d_s \geq 0.50$ ）。中でも「友人・知人」の効果量が大きく（Cohen's $d = 1.41$ ）、「自己有用感」を感じる者ほど「友人・知人」からのサポートを得やすいことが示唆された。また、「自己有用感」を感じる居場所がある者は「居心地の良さの感覚」、「課題・目的の存在」、「被信頼・受容感」の得点が高く、そのような居場所がない者よりも適応感が十分に高かった（Cohen's $d_s \geq 0.89$ ）。「劣等感のなさ」に有意差はなかった。

アタッチメント・スタイルの2次元と社会的居場所の2つの機能は異なる関連を示した（表3、表4の両表を参照）。すなわち、「本来感」を感じる社会的居場所がある場合は、ない場合と比べて、回避得点に有意差はなかったが（Cohen's $d = 0.41$ ）、不安得点は有意に低かった（Cohen's $d = 0.75$ ）。これとは対照的に、「自己有用感」を感じる社会的居場所がある場合は、ない場合と比べて、回避得点は有意に低かったが（Cohen's $d = 0.62$ ）、不安得点に有意差はなかった（Cohen's $d = 0.24$ ）。効果量を見る限り完全ではないものの、これは一種の二重乖離に近い結果である。つまり、社会的居場所が有する「本来感」を担保する機能はアタッチメント・スタイルの「不安」と主に関連し、対照的に、居場所の「自己有用感」を担保する機能は「回避」と主に関連すると解釈できる。

総合的考察

大学生の学生生活における適応感と、親密な他者から受けるソーシャル・サポートに、アタッチメント・スタイルおよび社会的居場所の存在がどのように関わっているかを調査結果に基づき数量的に検討した。

その結果、アタッチメント・スタイルと学校適応感については、「回避」も「不安」も、「居心地の良さの感覚」および「課題・目的の存在」との負相関が認められた。「回避」については、これに加え「被信頼・受容感」との負相関も認められた。アタッチメント・スタイルとソーシャル・サポートについては、次元、サポート源（父、母、先生、友人・知人）に関わらず、全ての組み合わせで負相関が認められた。アタッチメント・スタイルが、大学生の学校適応とソーシャル・サポートの享受における重要因であることが示唆されたといえよう。

社会的居場所の有無と学校適応感については、「本来

感」も「自己有用感」も、それらが担保されるような社会的居場所がある場合の方がいない場合よりも、「居心地の良さの感覚」、「課題・目的の存在」、「被信頼・受容感」の得点が高かった。社会的居場所の有無とソーシャル・サポートについては、「本来感」が担保されるような社会的居場所がある場合の方がいない場合よりも、「先生」と「友人・知人」から享受するソーシャル・サポートが大きかった。一方、「自己有用感」が担保される社会的居場所がある場合には、ない場合よりも、サポート源に関わらず、享受するソーシャル・サポートが大きかった。社会的居場所も、大学生の学校適応とソーシャル・サポートの享受における重要因であることが示唆されたといえよう。

本調査の結果は、総じていえば予想通りであり、アタッチメント・スタイルについても、社会的居場所についても、学校適応感およびソーシャル・サポートとの強い関連が示された。しかし、下位次元、下位尺度、ソーシャル・サポート源となる人物によって、それは必ずしも一様でもなかった。今後は、これらの結果について、再現性を確認する必要がある。また、教育的示唆を得る上では、養育者とのアタッチメント・スタイルが望ましくない傾向にあるにも関わらず、学校適応感やソーシャル・サポートが高い者の特性、あるいは高い状況や領域の特性について議論し、検証していく必要がある。

利益相反

本研究に関し、開示すべき利益相反関連事項はない。

引用文献

- 1) 前島康男（2016）登校拒否・不登校問題の歴史と理論—学校に行かない・行けない子どもの言説史—東京電機大学総合文化研究, 14, 23-48.
- 2) 文部科学省（2013）学校における子供の心のケア—サインを見逃さないために— Retrieved from https://www.mext.go.jp/a_menu/kenko/hoken/_icsFiles/afieldfile/2014/05/23/1347830_01.pdf (2023年03月24日閲覧)
- 3) 文部科学省（2013）学生の中途退学や休学等の状況について Retrieved from https://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/26/10/_icsFiles/afieldfile/2014/10/08/1352425_01.pdf (2023年03月24日閲覧)
- 4) 日本学生支援機構（2023）コロナ禍における学生同士の交流に関する取組事例集【増補版】 Retrieved from https://www.jasso.go.jp/statistics/gakusei_torikumi/_icsFiles/afieldfile/2023/01/16/202301_kouryujirei.pdf (2023年03月24日閲覧)

- 5) 嶋 信宏 (1992) 大学生におけるソーシャルサポートの日常生活ストレスに対する効果 社会心理学研究, 7, 45-53.
- 6) 下村英雄・木村 周 (1997) 大学生の就職活動ストレスとソーシャルサポートの検討 進路指導研究, 18, 9-16.
- 7) 山下倫実・坂田桐子 (2008) 大学生におけるソーシャル・サポートと恋愛関係崩壊からの立ち直りとの関連 教育心理学研究, 56, 57-71.
- 8) 日本教育カウンセラー協会 (2001) ピアヘルパーハンドブック 図書文化
- 9) 下村英雄 (2009) 大学のキャリアセンターの本質とは何か 職業研究, 2009 秋期号, 3-5.
- 10) Bowlby, J. (1973). *Attachment and loss, vol. 2. separation: Anxiety and anger*. Basic Books. (黒田実郎・岡田洋子・吉田恒子訳. 1977『母子関係の理論Ⅱ 分離不安』岩崎学術出版社)
- 11) Schmitt, D. P. (2005). Is short-term mating the maladaptive result of insecure attachment? A test of competing evolutionary perspectives. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 31, 747-768.
- 12) Simpson, J. A., & Rholes, W. S. (2015). *Attachment theory and research: New directions and emerging themes*. Guilford Press.
- 13) Szepeswol, O., Simpson, J. A., Griskevicius, V. et al. (2015). The effect of unpredictable early childhood environments on parenting in adulthood. *Journal of Personality and Social Psychology*, 109, 1045-1067.
- 14) Hazan, C., & Shaver, P. (1987). Romantic love conceptualized as an attachment process. *Journal of Personality and Social Psychology*, 52, 511-524.
- 15) Brennan, K. A., Clark, C. L., & Shaver, P. R. (1998). Self-report measurement of adult attachment: An integrative overview. In J. A. Simpson & W. S. Rholes (Eds.), *Attachment theory and close relationships* (pp.46-76). New York: Guilford Press.
- 16) Fraley, R. C., Heffernan, M. E., Vicary, A. M., & Brumbaugh, C. C. (2011). The experiences in close relationships- relationship structures questionnaire: A method for assessing attachment orientations across relationships. *Psychological Assessment*, 23, 615-625.
- 17) 古村健太郎・村上達也・戸田弘二 (2016) アダルト・アタッチメント・スタイル尺度 (ECR-RS) 日本語版の妥当性評価 心理学研究, 87, 303-313.
- 18) 杉本希映・庄司一子 (2006) 「居場所」の心理的機能の構造とその発達の变化 教育心理学研究, 54, 289-299.
- 19) 則定百合子 (2008) 青年期における心理的居場所感の発達の变化 カウンセリング研究, 41, 64-72.
- 20) 石本雄真 (2010) こころの居場所としての個人的居場所と社会的居場所—精神的健康および本来感, 自己有用感との関連から— カウンセリング研究, 43, 72-78.
- 21) 石本雄真 (2010) 青年期の居場所感が心理的適応, 学校適応に与える影響 発達心理学研究, 21, 278-286.
- 22) 西中華子 (2014) 心理学的観点および学校教育の観点から検討した小学生の居場所感：小学生の居場所感の構造と学年差および性差の検討 発達心理学研究, 25, 466-476.
- 23) 尾田朱里・吉川はる奈 (2020) 小学生の居場所感の特徴と変化—高学年児童を中心に— 児童学研究, 44, 37-42.
- 24) 国立教育政策研究所 (2015) 「生徒指導リーフ」シリーズ「絆づくり」と「居場所づくり」(第2版) Retrieved from <https://www.nier.go.jp/shido/leaf/> (2023 年 03 月 24 日閲覧)
- 25) 久田 満・千田茂博・箕口雅博 (1989) 学生用ソーシャル・サポート尺度作成の試み (1) 日本社会心理学会第 30 回大会発表論文集, 143-144.
- 26) 大久保智生 (2005) 青年の学校への適応感とその規定要因—青年用適応感尺度の作成と学校別の検討— 教育心理学研究, 53, 307-319.

School adjustment and social support received from intimate others: An analysis focusing on attachment styles and the function of social place with intimate others

Saeko Kaneko, Nobuyoshi Iwaki and Isao Takahashi

Summary

This study examined college students' sense of adjustment in their student life from the perspective of their relationships with intimate others (father, mother, teacher and friend). People tend to form attachments with intimate others and are more likely to receive social support from them. Therefore, we measured the avoidance and anxiety dimensions of attachment styles among college students ($n=120$) and examined their association with students' sense of school adjustment and social support received from intimate others. The results revealed that students with low avoidance and anxiety tendencies were better adjusted to school and enjoyed more social support from intimate others. Additionally, those who had a social place with intimate others were better adjusted to school and enjoyed more social support than those who did not. These findings suggest that students with strong avoidance and/or anxiety tendencies should develop social places to obtain social support from intimate others. Moreover, it was found that the function of ensuring a sense of authenticity perceived in social place was primarily associated with the anxiety dimension of attachment, while the function of ensuring self-usefulness was primarily associated with the avoidance dimension.

Keywords: attachment, school adjustment, social support, social place